

天北原野 (上)

三浦綾子



朝日新聞社

天北原野（上）

昭和53年 8 月20日 第1刷発行

定価300円

昭和54年 7 月10日 第2刷発行

著 者 三 浦 綾 子

発 行 者 朝日新聞社 藤 田 雄 三

発 行 所 朝日新聞社 東京 大阪 名古屋 北九州

印刷製本 凸版印刷株式会社

0193-260158-0042 ©AYAKO MIURA 1978

天北原野

(上)

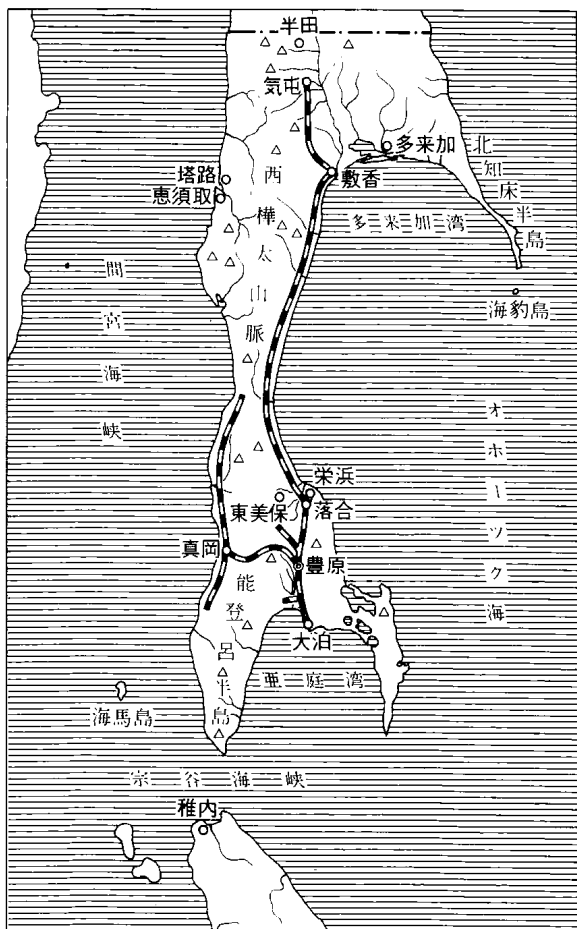
三浦綾子

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 穰 治
地 岡 吉 沢 家 久

天
北
原
野

(上)



エゾカンゾウ

一

菅井のお貴乃を見ろ、まだ十七だが、お貴乃は帯の結び方ひとつ、袴の合わせ方ひとつ見ても、ほかの娘とはちがう、とハマベツ部落の若者たちは噂しあった。

その噂の主、菅井貴乃は、いま池上孝介に一步遅れて、ゆっくりと砂山を登って行く。砂山は昨日までの雨に堅くしまっていて、二人の下駄の跡がくっきりと深い。貴乃の、紫の銘仙の裾からのぞく素足が、はっとするほど白かった。砂山のところどころに、砂鉄が黒い流線を描いていた。

ハマナスの花の一群が風に揺れている。その向こうに、七月の太陽にきらめく海があらわれた。砂山を登るにつれて、海は広くなる。登りきると、足もとは熊笹におおわれた崖で、眼下にハマベツの海岸部落があった。

こんぶを干した黒い浜が見える。浜に沿って、細い道がうねっていた。道の両側に、小さな家がまばらに立っている。潮風にさらされた^{まきやね}桎屋根が白茶けていた。

貴乃の住む台地の部落も豊かとはいいかねた。が、小学校や、寺や、製材所などの大きな建物があつて、戸数も多い。海と崖にはさまれた帯のような浜の部落とはちがつて、一里ほど向こうの低い山並みまでは原野がひろがる。低い山並みの向こうには、更に遠い山々が重なり、その果てに天塩山脈が南北に走っている。

「まあ、こんなにたくさん？」

貴乃が驚きの声をあげた。その声に、孝介は白がすりのたくましい肩をねじるようにふり返つた。

崖ぶちの草の中に群らがり咲く橙色の花を、貴乃は指さした。花卉が百合に似たエゾカンゾウである。ハマナスのように、はでやかな色ではないが、明るい花だ。

陸からの風が、二人の間を通りぬけた。この暖かい風をヒカタ、逆に海から陸に吹く寒い風をヤマセと、土地の人は呼ぶ。

「感じのある花ねえ」

「感じのある花？ お貴乃さんもそう思う？ ぼくもだよ。真実のある感じでね、ぼくも好きなんだ」

部落の、ほかの若者たちとちがつて、孝介は標準語も話す。そんなことも貴乃には好ましかった。

「真実？」

「そう。花にはどこか、だますところがあるからね。まるまる信用ができないんだ。このきれいなハマナスにだって、トゲがあるしね」

「まあ」

「だが、このエゾカンゾウの花は、素朴で真実で、そして氣品があつて、誰かさんみたいだ」

孝介はちらりと貴乃を見た。

「あら」

頬をあからめて、くるりと背を向けると、風が貴乃の裾を乱した。孝介がまぶしげにまばたきをした。濃い眉の下のその目が、深々と澄んでいる。

「孝介の目はおっかねえ。おらの心んなか、見透しているようだもんな」

孝介は小学生のころから、大人からも友だちからもそういわれてきた。その深い目が貴乃は好きなのだ。いつまでも見飽きぬ目だ。

孝介はだまって海を見た。貴乃も並んで海を見た。遙か水平線に、黒い船影がひとつ、一の字に見える。左手の海に眉毛島と呼ばれる天売・焼尻の島が眉のように並び、遠く右手の沖には、裾をひく利尻岳が、くつきりと海の上に浮かんでいる。輝く太陽の下に、みどりの海が明るい。日本海に面する北国のこのあたりでは、七月が一番明るい季節なのだ。

この砂山は、孝介の家の地つづきにある。家のすぐ裏に、植えて何年も経たない丈低い落葉松が百本ほどあり、そこを通りぬけると、すぐこの砂山なのだ。他の人はほとんど来ない場所だが、口うるさい部落の人々の目をさけて、二人が会うのはいつも夜だった。こんな明るい日の下で会うことはめったになかった。

「ね、貴乃さん」

腕組みをして、海を見ていた孝介がふり返った。

「なあに？」

いつも微笑を含んでいる貴乃のきれいな目が、まっすぐに孝介に向けられた。

「実はね、昨夜、おやじとお袋にお貴乃さんのことを話したんだ」

「まあ、ほんとう？ それで？」

一瞬、貴乃の微笑が消えた。

「うん。ぼくも叱られることは覚悟していた。何しろ、まだまだ日本ではね、恋愛を何かみだなことのように思っているからねえ。この海の向うのロシヤじゃ、もう六年も前に革命があったっていうのに……」

「それで、やっぱり叱られたの？」

「いや、それがね、相手がお貴乃なら文句はないってね、大した喜んでくれて……」

「まあ、本当？ 校長先生が喜んでくれたの？」

貴乃は無邪気に喜びの声を上げた。

孝介の父・池上太郎が、名寄なよしからこのハマベツの小学校に転任して来たのは、明治天皇崩御の年だから、もう十二年にもなる。

八の字ひげを鼻の下にたくわえ、ひどく姿勢がよい。いつも反り身になって歩く。校長といっても、一年から高等二年まで、僅か四学級。百三十八人の生徒しかいない小さな小学校の校長だ。そのうち、ハマベツの生徒は八十人余りで、ほかは近在の幾つかの小さな部落から通ってくる。

孝介の父は、よく生徒たちにこういつて聞かせる。

「池上次郎つつうのが、『源平盛衰記』に出てくるがの。先生は池上太郎だから、先ず、その兄

貴株ってえところだな」

生徒たちは、「源平盛衰記」が何か、池上次郎が源氏方か平家方か、知りはない。が、その名は一年生でも覚えている。

また校長はこうもいう。

「徳川幕府の時代に、池上太郎左衛門つつうどえらい名主がいての。製糖法、つまり砂糖のつくり方を完成したのは、実にこの男なのだ」

それで、生徒たちは何となく「おれたちの校長先生は大したえらい先生だ」と思っている。事実池上校長は博識で温厚だから、部落の人々も心服している。

孝介は、旭川中学を卒業後、父の学校の代用教員をして四年になる。ちょうど中学を卒業する三月、ハマベツ小学校の初老の教師が、心臓マヒでぼっくり亡くなった。四月の新学期を控えて、汽車も通らず電灯もないこの僻地のハマベツに来てくれる教師を、早急に見つけるのは困難だった。そこでとりあえず、孝介がかり出されたのである。

「おやじがねえ、ほんとにお貴乃は嫁にきてくれるのかってね、喜んでね。だが、問題はお貴乃のおやじさんじゃと、心配もしていたけれど……」

「うちのお父つつあんは、あのとおり変わりもんだから？」

お貴乃はほつれ毛を、形のよい耳にかきあげながら、あどけなく笑った。

「いや、変わりもんといいより、名人かたぎというのかな」

貴乃の父菅井兼作は大工の棟梁である。が、もともとは秋田出身の木挽きで、杣夫もした。造材万般にわたって明るく、特に山を見る才があった。

山を見るとは、つまりひと山から、どれだけの材木を伐り出せるか、その石数をつかむことである。木材業者が山の立木を買う時、その山の立木石数や、原木にした時の歩止まり等をよく判断できなければ、損をする。例えば、一万石しか材積がない山を、一万三千石は優にあるといわれて、そのまま取り引きをすれば、買い手は大損をするわけである。当時、官林からの払下げは別として、木材の売買には、様々な駆け引きや、悲喜劇があった。

貴乃の父・菅井兼作には、その点天与のともいえる才があった。須田原製材の須田原伊之助はいう。

「菅井のおやじはな、沢に立って、こう、金つばまなこをじつとこらしてな、山を見るんじや。そんときのおやじのこんめえ（小さい）体がよ、こう、ぐつとでっかく見えるもんなあ。ややしばし、じつとみつめていたおやじがな、こう、腰からなたまめぎせるを出してな。キザミを太え指でゆっくりとつめてよ。さて火をつけるとな、『ま、この山あ、一万石だあな』と、なんでもねえ顔で、きせるを口にくわえるんだ。これがビタリだ。二十石と外れたこたあねえ。あれが本当の天才つつうもんだな」

山を見ること神のごとしといわれるこの貴乃の父は、至って無欲である。山師といわれる木材ブローカーになれば、大金が手に入るのは口に見えているが、決してそれはしない。人に頼まれて山を見ても、かなりの金にはなる。が、これも気が向かなければ、決して腰を上げない。針の先ほども欲がないのだ。

棟梁としての腕もいい。須田原製材の住宅建築のため、小樽からハマベツに来たのは五年前である。それ以来、どこが気に入ったのか、この片田舎に住みつくようになった。この時の二階建

の建築が見事だという評判で、稚内や留萌のほうからも建築を頼まれることがある。が、兼作の腕はいいが、棟上げに神主を呼ぶのを嫌うという評判が立った。

事実兼作は、

「切った紙をバサッバサッと振ったぐらいで逃げて行くようなもんは、魔でも何でもあんめえ。魔よけもお祓いもただの気休めだべ」

と、にべもない。第一、自分の家に神棚もない。

「神棚に乗っかるような、こんめえ神さんによ、図体のでっけえ人間が、なに頼むことがある」で、人々は、

「腕はたつども、偏屈もんでや」

と陰口を叩く。

「孝介さん、大丈夫よ。うちのお父つつあんはね、自分の一生のつれあいを、人に探してもらおうなんて思うなって、いつもいつてるぐらいなもの」

「それは偉い！ このハマベツに、そんなことをいえる親はありませんよ。それなら、もう安心だ」

「そうよ、大丈夫よ」

「うちのおやじはね、いずれにしろ、一応は誰か仲人を立てなければなあってね。須田原製材の大將に頼もうかといっていたけれど」

貴乃ほうなずいたが、なぜかふつと顔がかげった。それには気づかず、孝介は、

「じゃ、これで決まった。式は十一月の明治天皇様のお誕生日がいいって、おやじはいていた

けれど、いいね、お貴乃さん」

「ええ」

足もとの崖に群れ咲くエゾカンゾウをみつめながら、貴乃はこっくりとうなずいた。この日のエゾカンゾウの花を、貴乃は生涯忘れることはできなかった。

二

盆の八月十六日、須田原製材工場は休みである。いつも絶え間なくびびくモーターのうなりも、きょうは聞こえない。

工場から百メートルほど離れた所に、須田原の家があった。部屋が十二もある二階建のがっしりした家だ。羽幌や天塩まで行けば、旅館や大きな店は二階建である。だが、このハマベツや近在には、二階建の家は一軒もない。それで人々は、須田原の家を「二階家」とも呼んだ。「二階家」を建てた棟梁は、貴乃の父の菅井兼作だった。棟上げの日に、須田原伊之助は、紅白の餅を三俵も撒いた。その日には、ハマベツの者たちは大人から子供まで、歩ける者は一人残らず餅ひろいに来た。近辺の部落からも、小学生や若者が集まってきた。その群衆に向かって、二階から餅をまいた。紺のハッピにももひきをきりりとはいた若衆が五人、

「ほうら」「ほうら」

とかけ声をかけて餅をまいた。

「あれは豪勢なもんだったなあ。赤と白の餅っこの雨が、バラバラと降ってきてな」

ハマベツの人たちには、五年たった今も思い出話に残る事件であった。

いま、その二階家の十畳の茶の間で、伊之助と、次男の完治が、さしむかいで酒を飲んでいた。「盆でも、こんな暑い日は珍しいな」

九谷焼の金地に、朱の小菊を散らした銚子を傾けて、伊之助は自分の盃に酒をついだ。はだけた浴衣から、濃い胸毛がのぞいている。

「これぐれえの暑さだら、年中続いてもええ」

完治は茶ぶ台に片ひじをついたまま、小井にこんもりと盛られたウニに箸をのばす。ウニのほかに、アワビの刺身、キュウリの酢の物、コンニャクと野菜の煮つけが並んでいる。ウニの小井も、刺身の皿も安物で九谷の銚子や盃とは、ひどく不釣り合いだ。不釣り合いといえば、一等材を惜し気もなく使ったこの部屋、黒い砂壁の床の間に掛けられた虎の絵が、いやに貧弱である。台所から、魚を焼く匂いが流れてきた。伊之助の妻のフクが、七年前からいる勝手働きのトメに、

「活動写真^{かつどろ}は、八時からだったっけ？」

といている声が聞こえてくる。今夜は小学校の運動場で、「忠臣蔵」が上映される。暗幕がないので、暗くならねば始まらないのだ。

トメが焼魚を茶ぶ台の上において去った。まだ六時半を過ぎたばかりだ。他の者たちは、台所で夕食を終えたが、主人の伊之助と完治は、いつもこうして、あとまで酒を飲んでゐる。

離れからバイオリンの音が流れてくる。完治の兄が弾いているのだ。

「完治、校長さんこの孝介がな」

孝介と完治は小学校で同級だった。孝介は旭川の中学を出たが、完治は学校が嫌いで、小学校卒業後は父の製材の仕事を手伝っていた。

「孝介？ 孝介がどうかしたかい」

「うん、あれが嫁っこをもらうそうだ。校長に仲人を頼まれてな」

「へえ、孝介が嫁をもらう？ それは初耳だ。で、どこからだい」

「どこからだと思うな」

「そうだなあ。札幌がらか」

札幌には孝介の長姉も次姉も嫁いでいるのだ。

当たらうというように、完治はにやっと笑った。笑うと、まなぎしの險しさが消えて、急に人なつっこい顔になる。

「いんや、このハマベツだ」

「ハマベツ？ どの娘だ」

「ほら、お前もよく知ってるお貴乃よ」

「なに!? お貴乃？ お貴乃だと？」

声が大きかった。

「どうだ、完治、おどろいたろうが」

伊之助は、完治が単純に驚いたものと思った。が、顔がこわばっているのを見ると、伊之助はその大きな目をちかりと光らせ、刺身の皿を手前に引きよせた。

と、突然完治の眉がピリリと上がって、

「うるせえ！ バイオリンなんど、ぶち割ってしまえ」
と怒鳴った。

ビタリとバイオリンの音が止んだ。

台所の母のフクとトメの話し声も途絶えた。離れのほうから、妹のあき子が廊下をぱたぱたと走ってきた。あき子は六年生だ。

茶の間の入口に突っ立ったまま、あき子は赤い唇をとがらせた。いどむようないきいきとした目だ。

「完治あんちゃんのばか。またヤマセ吹かせて！」

いい捨てると、あき子は達吉の部屋のほうにかけ去った。

完治はあき子がかわいい。どんな時も叱ることができない。

「お前、お貴乃がほしかったんだな」

低い声で伊之助はいい、色よく焼けたカレイの身を器用にはいだ。

「……」

「完治、ほしけりゃ、手に入れろ。ほしいもんを手に入れるのが、男つつうもんだ」
こともなげに伊之助はいった。

三

（ほしけりゃ、手に入れろ？）